

【研究会】

アメリカ社会と禅仏教

岡 島 秀 隆

一 宗教統計から見たアメリカ宗教の全体像

米国でもっとも広範囲かつ包括的に行われた宗教統計はバリー・A・コスミン (Barry A. Kosmin) とシーモア・P・ラックマン (Seymour P. Lachman) がニューヨーク市立大学 (the City University of New York) 大学院の協力を得て一九九〇年に行った「NSRI (the National Survey of Religious Identification)」である。調査対象は一一万三〇〇〇人であったと言われている。また、その発展型で二〇〇一年に五万人規模で実施された「ARIS (the American Religious Identity Survey)」は一層洗練された統計資料を提供している。さらに、民間大手の統計会社や研究所のデー

アメリカ社会と禅仏教 (岡島)

タとしてはギャロップ社やハリス・ポール、ピュー・リサーチ・カウンシル、グレンマリー・リサーチ・センターなどのものが知られている。またD・バレットの『世界宗教大百科事典』の資料が有効である。もちろん昨今ではインターネットサイトから収集できる情報も多い。

「ARIS」によれば、二〇〇一年における全米の宗教上位二十位のうち最も多いものはキリスト教であり、米国総人口の七六・五%を占めている。第二位以降は無宗教（非宗教）の一三・二%、ユダヤ教の一・三%、イスラム、仏教の〇・五%と続いている。上位十位以内で前回調査（NSRI）の一九九〇年から二〇〇一年までの十年余に最も増加率の顕著な宗教は第八位のヒンドゥー教で二三七パーセントの

伸びを示している。増加率の二位は一七〇%の仏教で、無宗教とイスラムの伸張がそれに続いている。逆に、減少傾向にあるのはアグノステイック（不可知論者）とユダヤ教である。他にもデイスト（理神論）やシーキスム、バハイ、ニューエイジ、ネイティブ・アメリカンの宗教などが増加傾向にあるが、それらの信者数は十万人規模ないしそれ以下の人数に留まっている。ちなみに仏教徒は二〇〇一年で一〇八万二〇〇〇人と推計されている。

組織的宗教（organized religions）としては無宗教者や無神論者などの分類項目は除外され、上位からキリスト教、ユダヤ教、イスラム、仏教と続き、次いでヒンドウー教、ユニテリアン・ユニヴァーサリスト、ウィカン／パガン／ドウルイド（西欧起源の古代宗教）、ネイティブ・アメリカンの宗教が挙げられる。

大局的にみれば、米国の宗教人口構成はキリスト教徒が一億五九〇三万人と圧倒的多数派を占めており、二位のユダヤ教の二八三万人、イスラムの一〇万人、仏教の一〇八万人と比較すべくもないのである。

それではキリスト教内部の主な教派（denominational

families）にはどのようなものがあるだろう。上位十位まではカトリック、バプティスト（浸礼派）、メソヂイスト／ウエズレー派、ルター派、プレスビテリアン（長老派）、ペンテコスタル／カリスマ派、エビスコパリアン／アングリカン（聖公会／監督教会）、ユダヤ教、ラターデイセイנט／モルモン教、チャーチズ・オブ・クライストである。その後にはコングリゲイショナル／ユナイテッドチャーチ・オブ・クライスト（会衆派）、エホバの証人などが続いている。二〇〇一年の国民総人口に占める割合ではカトリックが二四・五%、バプティスト一六・三%、メソヂイスト六・八%、ルター派四・六%、長老派二・七%の順である。一九九〇年から二〇〇一年までの約十年の伸び率では会衆派が最も大きく一三〇%あり、チャーチズ・オブ・クライストやペンテコスタルも顕著な伸びを示している。一方バプティストとメソヂイストはほとんど変わりなく、データで見る限りユダヤ教は一〇%の減少、エホバの証人も四%の減少を見せている。また、その他の教派は安定的増加基調で推移している。

また、毎週の教会礼拝などへの出席率が高い教派はモル

Largest denominational families in U.S., 2001
(self-identification, ARIS)

アメリカ社会と禪仏教（岡島）

Denomination	1990 Est. Adult Pop.	2001 Est. Adult Pop.	Est. % of U.S. Pop., 2001	% Change 1990-2001
Catholic	46,004,000	50,873,000	24.5 %	+ 11 %
Baptist	33,964,000	33,830,000	16.3 %	0 %
Methodist/Wesleyan	14,174,000	14,150,000	6.8 %	0 %
Lutheran	9,110,000	9,580,000	4.6 %	+ 5 %
Presbyterian	4,985,000	5,596,000	2.7 %	+ 12 %
Pentecostal/Charismatic	3,191,000	4,407,000	2.1 %	+ 38 %
Episcopal/Anglican	3,042,000	3,451,000	1.7 %	+ 13 %
Judaism	3,137,000	2,831,000	1.3 %	- 10 %
Latter-day Saints/Mormon	2,487,000	2,697,000	1.3 %	+ 8 %
Churches of Christ	1,769,000	2,593,000	1.2 %	+ 47 %
Congregational/United Church of Christ	599,000	1,378,000	0.7 %	+ 130 %
Jehovah's Witnesses	1,381,000	1,331,000	0.6 %	- 4 %
Assemblies of God	660,000	1,106,000	0.5 %	+ 68 %

Adherents.com presents: Largest Religious Groups in the United States of America による

モン（七一％）、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド（六九％）、ペンテコステタル／カリスマ派／フォースクエア（六六％）であった。この結果は各教派メンバーの結束力の強さや敬虔さを示す指標になるかもしれない。ただ、この統計が自己申告であったことや週ごとの礼拝・諸行事の回数が教会によって異なる場合があることを考慮する必要がある。それにしても日本の神社・仏閣への参拝の度合とはまったく違う高い頻度を示しており、地域の教会と人々の日常的結びつきの深さを感じずにはいられない。

最後に二〇〇〇年の「ハリス・ポール」における宗教・教会会派別の割合をみると、キリスト教内部の全プロテスタントは五〇パーセントを超え、カトリックは約二〇パーセントでキリスト教人口は統計回答者中七〇パーセントを超えている。

このように米国におけるキリスト教はプロテスタント系が多数派を占める。一方教派別にみれば、カトリックが最大である。また、正教会系は少数派と言わざるを得ない。いずれにせよ、宗教構成全体を眺望するときキリスト教は米国最大の宗教であるが、その内部構成は実に複雑多様で

ある。ただ、上記統計資料からも、この多様性はほとんどプロテスタント教派の多様性に起因すると考えられる。

二 カリフォルニアの宗教事情

カリフォルニア州における宗教の構成も全国の傾向に対応している。諸宗教および諸教派の勢力分布を地域社会の印象から推察してみよう。まず庶民の日常生活の中においては多様なプロテスタント系の教会が眼を引くことになる。各地域のありふれた住宅街にも個性的な教会建築がまるで博覧会場のように林立している地区がしばしば見受けられる。一方、カトリック系の教会は少数ながら、それぞれの規模が大きく歴史・伝統を思わせる佇まいを見せている。サンフランシスコなどの都市部では、有名なカテドラルが洗練された建築美で内外の観光客の目を楽しませている。また、カリフォルニアにはスペイン王カルロス三世の命を受けて、当時ニュースペインと呼ばれたメキシコから北上した多くの開拓民とカトリック伝道の古い歴史があり、今日も州の中央を南北に貫くエル・カミーノ・リアル（ロイヤル・ロード／キングスハイウェイ）と呼ばれる幹線道路

沿いに、オールド・スパニッシュ・ミッションと言われる二十一のミッション（伝道団体）の歴史的建造物が存在している。そして、その創設者のひとりであり、サンディエゴからモントレーに到る九つのミッションを開設したパードレ・セッラ（Fray Serra/Father Serra）の名は不朽のものである。それゆえ、元来カトリック信仰の根強い場所であるが、現在メキシコ系を中心にヒスパニックの人口流入は著しく、彼らの信仰がカトリックであることから、この地域のカトリック信者数は確実に増加していると思われる。他の宗教ではユダヤ教の会堂が処々に見られ、ウルトラ・オーソドックス、オーソドックス、コンサバティブ、リフォームなどの諸派が活動し、この宗教が堅固に根付いていることを窺わせている。また移民国家の縮図のようなこの地域では多くの民族的コミュニティを拠点として種々の信仰が輸入されたり、そうした宗教の坩堝の中で新宗教が生み出されている。その中でアジア起源の諸宗教も健闘している。ピーター・W・ウィリアムスの『アメリカの宗教——起源から二十一世紀へ——』（イリノイ大学出版局）によると、アジア起源の諸宗教は三つのタイプに分類可能

である。第一に民族宗教（エスニック・レリジョン）はアジア系移民によって新大陸にもたらされ、主に移民の共同体の内部で活動が続いている宗教であり、中国や日本の移民社会で信仰される。日系社会における浄土教などはこれに属するとされる。第二は輸出型宗教（エクスポート・レリジョン）で、アジアの古い伝統のひとつに起源を持つが、過去百〇二百年の間に活動的な形態へと脱皮を果たした宗教で、日本の創価学会などはこれに該当するとされる。それらは伝道の新天地を求めて積極的に海を渡った宗教である。また、それらはアジア系民族にも欧米人にも同様に改宗を求める傾向があると言われている。第三の類型はエリート（輸入型）宗教と呼ばれている。米国の高等教育を受けた知識人達を中心として受容されている。既成のユダヤ・キリスト教的価値観に満足せず、さらなる変容を求める人々のための宗教である。それらは米国の人々が自ら選択して輸入した宗教といえよう。ヴェーダーンタ、禅、チベット仏教などがこれに当たるとされる。これらの三類型はアジアから渡来した諸宗教の特性を的確に捉える一面を持っている。だが、現実の諸宗教は各々が多面性を内在している

アメリカ社会と禅仏教（岡島）

ことも事実であろう。禅について見ても、そこにはさまざまな局面がある。時代の潮流の中で米国の人々が新たな価値観を求めて東洋に関心を寄せ、禅に可能性を見出していた時代には多くの教養人が禅の魅力に傾倒していた。禅ブームが巻き起った時期には種々の書物が禅を語り、人々はこぞってそれを読んだ。禅は確かにエリートの宗教であった。しかし、そんな時代にもサンフランシスコのジャパントウンやロスアンジェルスのリトウルト・キョーでは日系人が禅宗寺院で葬儀を行い、盆行事を行って先祖の供養を続けてきたのである。そのことは日系社会において禅宗が民族宗教の一翼を担っていたことを示している。さらには、禅ブームを欧米進出の好機と考えた禅宗各派は志ある人材を投入して国際伝道に力を注いだことも事実である。禅仏教の性質上、入門者に改宗を迫ることはなかったが、そこには輸出（伝道）宗教の側面が見られる。こうした多面性が今日の米国禅の多極化を導いたように思われる。

釈宗演、鈴木大拙の渡米に端を発する臨在禅の伝統はカリフォルニアにも大きな足跡を残している。佐々木承周によって一九六八年に設立されたシマロン禅センターは多く

の同門施設を開設してその影響を拡大した。本センターのインターネットホームページによれば、妙心寺に起源を持つ臨済寺シマロン禅センターは九〇年代の初期に臨済寺禅センターと改称したが、その系列寺院・修行道場も含めて今日も活発な活動が続けているようである。曹洞禅はサンフランシスコの桑港寺とロスアンジェルス の禅宗寺の両ミッションが地域の日系社会を中心に活動している。また、桑港寺にいた鈴木俊隆は一九六九年にサンフランシスコ禅センターを設立した。本センターの傘下にはグリーン・ガルの蒼竜寺やタサハラの禅心寺がある。鈴木の方法はバークリー禅センターや観音堂禅メディテーションセンター、さらにソノママウンテン禅センターなどに及んでいる。他方、禅宗寺から独立した前角博雄が設立したロサンジェルス禅センターや長田康哉のロングビーチ仏教会は現在もロサンジェルスで活動している。しかしながら、すでに植え付けられた禅の種子が今後どのように育ち如何ほどの収穫が期待できるかはまだわかっていない。

三 米国禅の現況―その受容と変容―

それでは米国における禅の受容はどのような段階に來ているのだろうか。最近の米国における宗教に関する出版物の中から、禅についての叙述を抽出してみよう。ダイアナ・L・エックは自著 *A New Religious America—The Ripening of Buddhist America* の中でアン・モリヤール (Don Morreale) の言葉として次のような引用をしている。

初期の粗雑さは終わりを告げて、瞑想はもはや一握りの空想家や詩人のもものではなくなった。人々が閑静な隠棲地で、彼らが仏教徒だと自称するかどうかはわからないけれど、株式仲買人やセラピストやソーシャル・ワーカーと肩を並べて坐禅する自分を発見することとは如何にもありそうなことである。それは二十代においては稀だが、四十代、五十代、六十代と増加する年配者の集まりである。(筆者―訳)

これらの叙述は禅が熟年の人々を中心として米国民に十分に認知されていることを示している。しかもそれは単に

文字の上での抽象的知識としてではなく、何か実践的鍛錬法として彼らの日常生活の近辺に存在しているものなのである。小さな書店の宗教コーナーで禅について語る何冊かの書物を発見することは難しいことではないし、インターネットを検索して最寄の禅センターや瞑想教室を見つけることは実に簡単である。それらの情報をたよりに禅センターなどを訪れて実際に坐禅指導を受けることは、チャレンジ精神旺盛な米国の人々にとってはひどく自然な成り行きである。

さらに、この書の米国禅の歴史を記す箇所では次のように述べている。

禅は米国最初の仏教的実践形態であり、「只管打坐」の曹洞禅と「隻手の音声」とは何かといった公案の商量を行う臨済禅を含んでいる。最も早い時期に、しかも最も広範に影響を与えた禅の教師は「もう一人の鈴木―鈴木俊隆」であった。彼は一九五九年に日本を発つて米国に渡ったが、米国の求法者に禅を教えようとしたのではなく、サンフランシスコにある日系米国人の曹洞宗寺院である「桑港寺」に赴任したのである。こ

アメリカ社会と禅仏教（岡島）



桑港寺旧址

の地で彼は坐禅の手ほどきを求めている学生たちを魅了することになった。彼らの多くは日系社会よりも坐禅を真摯に切望していた。鈴木は多くを期待せず、彼らを早朝五時半からの坐禅に参加するよう招待した。驚くべきことに、彼らはこぞつて顔を見せた。一九七〇年までに鈴木とその信奉者達は米国最初の都市居住型の禅センターの一つである「サンフランシスコ禅センター」を設立した。

坐禅の姿勢——足を組み、背筋を伸ばし、顎を引く——は修練を必要としたが、米国の求道者達は果敢に挑戦を試みた。それでもなお、彼らは坐禅における身体姿勢の修練より一層深い内的試練に直面した。何かの達成に向かってエネルギーとハートを賭ける意欲的アメリカ人気質（キャン・ドゥ・アメリカン・スピリット）はどんな時にも有益に働きつづけるが、坐禅の修練においてはこの内的姿勢もまた、変えられねばならなかったのである。何かを獲得しようとして修行する限り、決して何も修得できないだろう、なぜならば禅の修行とは目的達成志向型の文化における達成手段の

ひとつといったものではないからである。鈴木老師が「これらの形（坐禅）は正しい心の状態を会得するための手段ではない。この姿勢をとること自体が心の正しい状態を持つことなのである」と述べるところは此処である。日本の禅の指導者達が「一寸座れば、一寸の仏」（？）というのも同様である。鈴木老師の著作『ゼン・マインド、ビギナーズ・マインド』は全ての世代に亘る禅の入門書となった。この書はどのような先入見や観念、期待、哲学によっても頭を満たすことなく、坐禅の実習に向かうことが有利であるとする心強いメッセージを運んできたのである。初心の無垢（タブ・ラ・ラサ）は禅実修の格好の土壌である。（筆者・訳）これまでの歴史的経緯を思えば米国の禅の源流のひとつは明らかに日本禅であるが、この引用の前半には日本の禅に曹洞宗と臨済宗の二流があることや両宗の宗風を示す伝統的表現が叙されている。そして、後半部分では坐禅の身体姿勢を正しく保持する場合の困難や坐禅を行ずる時の内的心構えさえが解説されている。殊に内心の構えについて述べる箇所では米国人の気質にも配慮しながら、坐禅は悟



サンフランシスコ禅センター（正面）



サンフランシスコ禅センター（本堂）

りを得るための手段ではなく、坐するという行為自体に意義があることを理解させようと努めている。こうした心の構えにまで踏み込んだ説明が、たとえそれが禅への深い造詣を持つ著者によってのみ可能なことであつたとしても、一般書の中で行われていることは重要である。

エックは更に米国禅の現状をできるだけ具体的に描写しようとしている。たとえば、「サンフランシスコ禅センター」について、禅のアメリカナイゼーションのフラッグ・シップ（旗艦）となつたと指摘するとともに、センターの活動内容を紹介している。まず、ここでは接心など禅の伝統行持の綿密な継承がなされているという。筆者が直接訪問した時のセンター側の説明や施設内の調度（本堂に当たる部屋には北壁面中央に安置された本尊の前に畳が敷き詰められ、中央に拝席、その他にも磬子・木魚等が配置されており、坐禅室には日本の坐禅堂に準じた如法の配列で単上に坐蒲が並んでいた）などからもそれは窺える。その一方で新たな米国的取り組みもなされているという。宗教家が社会的問題に積極的に関わろうとする欧米的宗教風土から、エイズ危機の発生した時期には、センターの Issan Rishi

が中心となり、ベイエリア・エイズ・アクション・プロジェクトとハートフォード・ストリート禅センターを立ち上げたことが記されている。また、環境・農業問題への取り組みとしてはセンター傘下のグリーン・ガルチ・ファームなどでの新しいライフスタイルの提唱やこのファームとの連動で行われる菜食主義者向けのレストラン経営が紹介されている（グリーンズの名前で知られるレストランは北西方向に金門橋を望むフォートメイソンの美しい水際にあり昼夜多くの人々が訪れている）。筆者の訪問時にはグリーン・ガルチ・ファーム入り口には禅センターの表記や「蒼竜寺」の寺名もあり、広大な敷地にゲストハウスや坐禅堂、茶室、居住施設などがある。カントリー・ライフと禅の融合した自然派志向の瞑想的生活様式が米国の人々によって実践され日曜などには訪れる者も多い。さらに、米国特有の新しい取り組みもある。多民族・多言語国家である米国においては、坐禅指導に用いられる言語も英語だけでは不十分である。昨今のヒスパニックの増加傾向にも対応して、サンフランシスコ禅センターではスペイン語による坐禅の指導体制を整えつつあるという。また、高齢者・年少者のため



蒼竜寺ゲストハウス

の修練施設も検討されているというが、幅広い年齢層に配慮した施策である。

こうした叙述を見ると、米国禅が伝統を保ちながらも、すでに独自の歩みを開始していることがわかる。それと同時に、米国禅の現状に関する明確な分析や禅への深い理解が、こうした書物を通して広く供給されていることに驚かされる。

四 米国禅の未来——禅ブームの収束——

六〇年代のヒッピームーブメントが欧米型の物質主義的価値観一辺倒の社会に対する痛切な批判とそこからの超脱を求めた文化運動であるとする当時の欧米社会の東洋への関心は新たな価値を探索する必然的動向であった。禅ブームもまたそうした思潮の中で浮揚したものと考えられる。

こうした運動のピークが過ぎ去った現在、禅が何ゆえに欧米社会で脚光を浴びることになり、またどのような人々に受け入れられたのかなどという点を再度総括することは大切であるが、現状に眼を向けるとき、欧米、殊に米国社会にあって、禅（ZEN）という言葉が十二分に認知される

ようになったのは事実である。書店にZENのコーナーが設けられていることもしばしばであり、ZENと命名された日本食レストランなども見受けられる。書店などで見かける玩具の箱庭キットにもZENの文字が印刷されている。この言葉は最近まで人心を強く惹きつける一種の「魔法の言葉」であった。しかし、今日この言葉はかつての神通力を失い始めている。その理由のひとつはこの言葉が余りにも広義に使用されたために、その意味が拡散してしまったことによる。米国に到達した仏教諸派はそれぞれの系統的特性を強調しつつも、その伝道に有益と考えた時には仏教としての同質性をも主張した。ZENという言葉が圧倒的宣伝効果を持つのであれば、彼らはいずれも類似した仏教的瞑想法を伝承していると主張し、その方法的類似性を強調しつつZENの語を活用した。時には仏教以外の宗教さえがこの言葉を有意義に利用した。こうしてZENの言語概念は拡充の一途を辿り、その結果ZENはエキゾティックな雰囲気を残しながらも東洋的瞑想一般を指示するような曖昧な言葉になってしまった感がある。また、欧米人にとってZENは本来の神秘性を失いだしているようにも思

われる。何ゆえにZENは神秘性を失うことになったのであろうか。その理由の一つはおそらくZENを説く者がそのように教えたことによる。宗門においても坐禅とはまさに誰にでもできる日常茶飯の作法であり、しかも何か特別な超能力の体得を示唆するような悟達の為の手段であると考え、ことを強く戒めている。それは本物の禅を説くことに他ならなかったが、こうした教えが浸透するにつれてZENの神秘性は失われることになったのである。それは正伝の仏法が正しく伝達されることと表裏のことといえよう。さらに、こうした正しい教えの効果は言葉による解説の方面だけではなく、坐禅の実習面においても発揮され、坐禅が超人的境地を産むものではないことが体認されることになる。次に、禅僧や禅修行に過大な期待を寄せる純粹な人々が、現実の禅仏教ないしは禅を勧める宗教的集団に潜在し、時として顕在化する世俗的側面に対して抱く失望や嫌悪・落胆はZENの神秘性を消失させるのに加担したと思われる。第三に、ZENの神秘性は新たに登場する東洋的神秘宗教や仏教他宗が放つ神秘性によって相対的に凌駕され、ZENはかつての魅力を半減させられたかに見える。同じ

仏教系統の密教が昨今欧米で注目を集めている。その理由はいくつも考えられるが、曼荼羅や陀羅尼の持つ視覚的イメージや音声的效果が十分に神秘的雰囲気を出しているのは事実であろう。そうした対抗勢力の伸張に比べてZENの神秘が新鮮さを失い始めていることは否定できない。欧米人の関心が密教など他の方面にシフトし始めていることは事実である。一方、神秘性とは感じる側の一方的思い入れに起因する場合も少なくない。そう考えると、ZENの神秘性というものも、それがZENの持つ真の神秘的魅力ではなく、相手の都合のいい期待から生まれた神秘性ではないというケースも考えられる。それならば、今後禅の本当の神秘性が指し示されなければならない。

ともあれ我々は、まず禅ブームなるものが米国において収束していることをはっきり認識しなくてはならない。次に、禅がこの国で独自の歩みを開始していること、そして人々の日常生活の中に何がしかの居場所を確保し定着していることを確認しなければならない。

アメリカ社会と禅仏教（岡島）

まとめ

米国社会は多様な価値観の並存する社会である。そこに住む人々もそのことを充分に意識している。また、この社会ではあらゆる分野に競争原理が働く。従って宗教の領域においても、多様な形態や異種の教義を持つ諸宗教がキリスト教という土壌の上で競って花開こうとしている。毎年開花するものもあるが、枯れてなくなるものもある。米国禅の現況を考える時、先述したように米国の人々がかつて禅に何を求めたのかを振り返り、変容し続ける米国社会の只中で禅の魅力を再考する必要がある。さもないれば、禅は米国社会でその普遍的真理を十全に開陳することなく埋没してしまうかもしれない。将来、禅が米国でどのような展開を見せるかは、大方米国社会における青い眼の禅僧達の活躍と此処に暮らす人々の宗教的ニーズに委ねられている。しかし、米国禅はまださまざまな助言と支援を必要としているのも事実である。米国の禅の発展のために、如何なる姿勢で如何なる貢献が可能かを検討することも重要となろう。海外で誠実な活動に専心される日本の開教師諸

アメリカ社会と禅仏教（岡島）

兄の精進に敬意を表しつつ、新天地での禅の新たな展開に期待したい。

参考文献

- Eck, Diana L. 2001. *A New Religious America* (New York: HarperCollins Publisher Inc).
- Williams, Peter W. 1998. *America's Religions: From Their Origins to the Twenty-First Century* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press).
- 多田稔『仏教東漸——太平洋を渡った仏教——』禅文化研究所
／一九九〇年刊
- 目幸黙僊『禅とアメリカ』（『現代思想』総特集・禅）青土社
／一九八〇年刊